

〔西鶴織留^五〕一日暮しの中宿

一日も是に居ますうち鼻に手を當て見てつかはしやりませい、はたらきさへいたせばお氣に入事ぞと、出尻あらしたる跡にて見れば、大鍋にひらきを入れ、略下

〔和漢文操^一〕豆腐賦

北七里

むかし淮南王のへや住に、ある夜の小鍋せ、りより、此物をめで給ひ、略下

〔傾城色三味線^{大坂之卷}〕梅よりすいた萩野が一風

目が醒ると、夫婦起て紙燭燈し連て、臺所に出て棚にさしか、り、卵石五ツ、赤貝も煮る計りにして、是幸ひと爐の火を起し薄鍋をかけ、何も彼も打入て、此うまき事、どうもいへすと舌打して、

〔下學集^下〕器財^下煎盤^下弦鍋^下

〔茶湯獻立指南^八〕去達人の茶人の方へ、不時に數寄所望にて參らる、亭主忝とて、先待合へ御入被成とて申入、亭主自身きれいなるつるなべに何哉覽持出、略下

以用法爲名

〔倭名類聚抄^{十六}〕器^{十六}鑿^{十六}四聲字苑云、鑿^五煎餅盤是也、今案此間炒餅鐵盤也、

〔箋注倭名類聚抄^四〕器^四玉篇鑿餅鑿也、即此義、按說文無鑿字、蓋鑿所以熬物之器、故謂之熬、後從金作鑿也、

〔下學集^下〕器財^下煎盤^下

〔書言字考節用集^七〕器財^七鑿餅盤^七和名煎

〔東雅^{十一}〕器用^{十一}鑿イリナベ^{十一}略^{十一}今の如きは鑿讀みてイリナベといふあり、或人の説に、大者爲鑿、淺

はイリナベといふなり、鑿をヒラナベといふは、方言要目讀みてヒラガナベといふが如きは、即今も據りぬる也、鑿は増韻に釜屬とのみ注して、其形制は不詳、倭名鈔に煎餅盤といふが如きは、即今も據りぬる方俗にもより、又時制にもよる所なれば、今に依りて古を推すべからぬ事多かり、強て其説をならすべからず、